

中高一貫教育の導入（探究学習重視型）に向けた検討事項

論点 1 入学者選考に関すること・・・第1回部会（5/23）・第2回部会（7/21） 第3回部会（9月）

（背景・基本的な考え方）

- 国の考え方は、平成9年の答申や国会審議での附帯決議において、「受験エリート校化や受験競争の低年齢化が懸念されることから、公立学校（中等教育学校・併設型中学校）での入学者選抜では学力検査は行わない」としている。
- しかしながら、教育方針やカリキュラムを理解した生徒に入学してもらうため、必要最低限の選考を行う必要があることから、受験テクニックや知識量を測るのではなく、探究心や課題解決力、共感力、意欲を確認するための入学者選考を行う。
- 入学者選考においては、思考力、判断力、表現力等を総合的に測る適性検査を行う。

【検討内容】

入学者選考の実施日程、選考方法（適性検査や面接の実施方法、調査書の取扱いなど）、選考基準、出願時の提出書類、入学検定料など。

論点 2 教育内容に関すること・・・第2回部会（7/21）・第3回部会（9月）

（背景・基本的な考え方）

- 中高一貫教育導入のねらいである「チェンジ・メーカーを育てる」を実現するための教育内容。
- 学校教育法施行規則において、中学校の標準授業時数は週29時間。
- 中高一貫校は、特例制度により、週29時間を超えて授業を実施することが可能。

【検討内容】

導入校の特色、教育課程（総授業時間数、各教科の時間数）、日課表（登下校時間など）など。

論点 3 部活動に関すること・・・第3回部会（9月）

（背景）

- 併設中学校は全体で6学級（明和高校は9学級）と小規模で生徒数が少ない。体育館は新設するため占用できるが、グラウンドや武道場等は高校との共用。

【検討内容】

併設中学校における部活動の在り方（地域移行・地域連携を含む）

論点 4 学校給食に関すること・・・第3回部会（9月）

（背景・基本的な考え方）

- 併設中学校では、学校給食を提供する。
- 調理場を設置しないことから、地元市町村の給食センター又は民間給食事業者からの提供とする。
- 高校においても、希望する生徒に昼食の提供を行う。

【検討内容】

併設中学校ごとの学校給食の提供方法

論点 5 教職員配置に関すること・・・第1回部会（5/23）・第2回部会（7/21）

（1）併設中学校の教職員配置

（基本的な考え方）

- 中高一貫校の教育内容の実施に必要なとなる教職員を配置する。

【検討内容】

開校初年度から学校完成時までの職種ごとの教職員の配置人数、教科別の教員数、中学校教員と高校教員の内訳

（2）開校準備員の配置

（基本的な考え方）

- 開校の前年度（2024年度）に、校内体制、年間行事予定、各種指導計画などを作成 → 教員を配置
- 必要物品の購入、各種契約業務 → 事務職員を配置

【検討内容】

開校準備員の人数、職種、勤務場所

論点 6 学校名に関すること・・・第3回部会（9月）

- 学校名は、各導入校の意見を聴取のうえ、教育委員会において決定する。

【学校名のイメージ】

タイプ別の中高一貫校の名称 ※ 明和高校に当てはめた場合のイメージ例		全国89校の タイプ別学校数
Aタイプ	愛知県立明和中学校・高等学校	47校
Bタイプ	愛知県立明和高等学校・附属中学校	36
Cタイプ	愛知県立〇〇中学校 愛知県立明和高等学校	6

論点1 入学者選考に関すること（探究学習重視型）

1 「愛知県 中高一貫教育導入方針」における入学者の選考方法

(1) 適性検査

- ・出題は、小学校学習指導要領の範囲内とし、思考力、判断力、表現力、課題解決力等を総合的に測る。

(2) 面接

- ・中高の6年間学び続ける意欲や志望動機、適性、コミュニケーション能力などを見る。

(3) 調査書

- ・調査書の内容や取扱いについては、小学校現場の負担も配慮しながら、今後検討する。

(4) その他

- ・明和高校の併設中学校（音楽コース）は、実技検査を実施する。
- ・抽選の導入の有無は、今後検討する。

2 入学者選考における国の考え方

(1) 21世紀を展望した我が国の教育の在り方について（要約）（中央教育審議会第二次答申（1997年6月））

- ・受験競争の低年齢化を招くことのないよう適切な配慮を行うことが不可欠。
- ・いたずらに難度の高い試験問題によって選抜を行うことなく、学校の個性や特色に応じた適切な方法により入学者を定めることが望ましい。
- ・地方公共団体が設置する学校は、学力試験を行わないこととし、入学希望者が多く選抜が必要となった場合でも、中高一貫校の個性や特色に応じて、抽選や面接、推薦、調査書、実技検査など多様な方法を適切に組み合わせることが適当。

(2) 学校教育法施行規則の改正（1999年4月施行）

- ・公立の併設中学校は、学力検査を行わない。（第110条、第117条）

(3) 中高一貫教育制度に関する主な整理（要約）（中央教育審議会初等中等教育分科会（2011年7月））

- ・志願者が多いことから、学校の目標や目指すべき人材育成像、これに基づく教育内容・方法に応じて、これに見合う資質・能力を有する生徒を見極めるために入学者を選抜することは許容されても良いと考えられる。
- ・小学校教育では、①基礎的・基本的な知識・技能の習得、②知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等、③主体的に学習に取り組む態度を、バランスよく育てており、これを損なわないように留意することが必要。

- ・設置者において、学校の目標、人材育成像、教育内容・方法の特色、どのような適性を有する生徒を求めるのか、その考え方がどのように選抜方法に反映されているのかを明確にし、広く周知することが最も重要。

- ・公立学校ではより積極的に抽選を導入すべきとの指摘があるが、抽選は生徒の資質・能力や努力と関係ないところで結果が決まり、生徒に不公平感や精神的ショックを与えるおそれがある点に留意すること。

3 全国の入学者選考の状況

(1) 適性検査

- ・小学校学習指導要領の範囲内で、思考力・判断力・表現力等を総合的に測っている。
- ・教科ごとに検査するのではなく、適性検査Ⅰ・適性検査Ⅱなどに区分し、教科横断的に検査している。
- ・会話文や図表などの資料から必要な情報を読み取り思考・判断する問題が多い。しかし、多い情報量に対して、短い時間の中で素早く情報を処理することが必要な問題が見られる。また、長文の記述問題も多い。
- ・英語は、ほとんど実施していない。（愛知県内の国立・私立も同様）

(2) 面接

- ・個人または集団の面接を実施。（愛知県内の私立は、実施していない学校が多い）

(3) 調査書

- ・調査書を志願する際の必要書類としている。（愛知県内の私立では、直近の通知表の写しも提出可能としている学校が多くある。）

(4) 抽選

- ・ほとんど実施していない。（愛知県内の国立・私立は実施していない）

(5) 実施時期

- ・1月上・中旬の土・日曜日に、適性検査等を実施しているケースが多い。（愛知県内の国立・私立は、主に1月上旬から2月上旬の間の土・日曜日に実施）
- ・志願倍率は、平均すると3倍程度であるが、千葉県・東京都・神奈川県などの都市部や国際バカロレア認定校では、5倍から10倍程度と志願倍率の高い学校がある。
- ・一次検査・二次検査による二段階選抜は、埼玉県・千葉県・広島県・札幌市・さいたま市・千葉市で実施。（募集人員の2倍から2.5倍程度を目安に一次検査通過者を決定）

（参考）二段階選抜における一次検査通過者

募集人員の2.5倍程度：埼玉県、さいたま市

募集人員の2倍程度：広島県、千葉市

募集人員の2倍以内：札幌市

募集人員の4倍程度：千葉県

4 部会（第1回 5/23、第2回 7/21）における入学者選考に関する委員の意見

(1) 受験の過熱化

- ・小学生は、教科横断的な問題に慣れていない。
国立・私立の受験対策と、教科横断的な問題の受験対策の両方が行われ、小学生に負担がかかるのでは。
- ・小学校6年生が、受験対策のために欠席しないような手立ても考えてもらいたい。
学習塾では、既に受験対策をうたって児童を募集し、受験の過熱化が見られる。
- ・面接のためのトレーニングがなされるのでは。
- ・保護者説明会では、入学者選考のねらいをしっかりと説明してもらいたい。

(2) 適性検査・面接等の方法

- ・基礎・基本のレベルにすると、点数に差がつかないのでは。
- ・外進生に比べて内進生の学力が劣ることのないよう、適性検査を検討してもらいたい。
- ・学校の方針やメッセージを打ち出すために、導入校ごとに問題や配点比率を変えることが考えられるのでは。
- ・面接で探究心などの力を見出すためには、一定の面接時間が必要。
- ・中高6年間、十分に学ぶ力が備わっていることが、適性検査で確認できるなら、面接ではなく抽選でも良いのでは。
- ・開校前年度は、併設中学校の教員が配置されていないため、高校の教員だけで面接することとなるが、3学期には高校入試も重なり入試業務が大変になる。

(3) 実施時期

- ・新年度の準備を進めるため、入学者を早く決めてもらいたい。

5 入学者選考方法のイメージ

(1) チェンジ・メーカーの育成をねらいとした探究学習重視型の中高一貫校に適した入学者選考とする。

① 適性検査では、小学校教育の成果を測るものとする。

受験テクニックや知識量を測るのではなく、知識・技能を活用した思考力・判断力・表現力・課題解決力を測る。

受験対策による過熱化を抑えるため、適性検査は、過度に難しい問題を出題しない。(例：長文記述や、素早い情報処理が必要な問題など)

② 面接では、チェンジ・メーカーの育成や探究学習にとって重要な資質をしっかりと見る。

導入校の教育方針やカリキュラムを理解し、中高6年間にわたって探究の学びを続けていこうとする意欲を見る。

<資質の例>

- ・様々なことに興味をもって課題を見つけ出し、解決に向けてとことん突き止めようとする「探究心」
- ・自分が当たり前ではなく多様な考え方があることを理解し、互いのよさを生かしながら物事に取り組もうとする「共感力」「寛容性」
- ・困難なことに対しても諦めず、よりよい解決に向けて取り組もうとする「粘り強さ」

(2) 教員に過大な負担をかけないものとする。

愛知県内の国立・私立中学校における調査書の活用状況を参考にして、直近の通知表の写しの提出で可能とするなど、小学校現場への負担が抑えられる仕組みとする。

入学者選考方法の概要（案） （第一次導入校・探究学習重視型）

区 分	イメージ
(1) 育てたい 生徒像	<ul style="list-style-type: none"> ○ 答えのない課題に対して、問いを立て続けることができる生徒 ○ 多様性を尊重し、互いの良さを生かすことができる生徒 ○ 積極的にチャレンジし、粘り強く取り組むことができる生徒
(2) 適性検査	<ul style="list-style-type: none"> ○ 出題は、小学校学習指導要領の範囲内とする。 ○ 小学校の教育活動を通して身に付けた知識・技能を活用した思考力・判断力・表現力・課題解決力を測る。 ○ 教科で区分することなく、教科横断的な問題とする。 ○ 英語は出題しない。 ○ 全問、選択式とする。
(3) 面 接	<ul style="list-style-type: none"> ○ チェンジ・メーカーの育成や探究学習にとって重要な資質（探究心、共感力、寛容性、粘り強さなど）を見る。 ○ 志願者の体験を基にやり取りしながら、志願者の資質を見出していく「リフレクション（振り返り）型」により行う。 ○ 導入校の教育方針やカリキュラムを理解し、中高6年間、探究学習をしっかりと学び続けようとする意欲や志望動機を見る。
(4) 調 査 書	<ul style="list-style-type: none"> ○ 直近の通知表の写しを、入学者決定の参考にする。
(5) 抽 選	<ul style="list-style-type: none"> ○ 抽選を実施しない。
(6) 実施時期	<ul style="list-style-type: none"> ○ 適性検査で基本的な学力（思考力・判断力・表現力等を含む。）を測り、受験者数をしぼった上で面接を行う「二段階選抜（一次検査：適性検査、二次検査：面接）」を実施する。 ※ 一次検査通過者は、他県の例を踏まえ、募集人員の2倍～2.5倍（160人～200人）程度を想定。 ○ スケジュールは、愛知県内の国立・私立中学校と同様とする。（12月～2月上旬までの間） 一次検査及び二次検査は、土曜日又は日曜日に実施する。 <div style="margin-left: 40px;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin-bottom: 10px;">① 入学願書の提出</div> <div style="text-align: center; margin-bottom: 10px;">↓</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin-bottom: 10px;">② 一次検査（適性検査）を実施</div> <div style="text-align: center; margin-bottom: 10px;">↓</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin-bottom: 10px;">③ 一次検査通過者の決定・通知表の写しや志願理由書等の提出</div> <div style="text-align: center; margin-bottom: 10px;">↓</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin-bottom: 10px;">④ 二次検査（面接）を実施</div> <div style="text-align: center; margin-bottom: 10px;">↓</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;">⑤ 入学許可候補者の決定</div> </div>

論点 2

教育内容に関すること（探究学習重視型）

1 中高一貫教育導入のねらい（愛知県 中高一貫教育導入方針）

社会が加速度的に変化し続け、将来の予測が極めて難しい時代において、様々な人と協働しながら、答えのない課題に対して、失敗を恐れずにチャレンジし、社会に変化を起こす「チェンジ・メーカー」を育成する。

2 探究学習を重視するねらい

- ・現代の社会は、解決すべき問題が多方面に広がって複雑に絡み合っており、答えが一つに定まらず、容易に解決に至らないことが多い。
- ・探究学習は、そうした問題と向き合って、生徒自身が自分で課題を設定し、その課題を解決するために情報を収集・分析し、自分がまとめた意見や考えを交換したり協働したりしながら、最適な答えや、自他ともに納得できる答えを見出すことを目指して進める学習活動である。
- ・探究学習を重視した中高6年間のゆとりあるカリキュラムを編成することで、より良い答えを探すため、異なる立場の人と多様な角度から話し合い、互いの良さを生かしながら粘り強く課題解決に取り組むことが可能となる。
- ・探究学習重視型の中高一貫校では、探究学習を通して、多様性を尊重し、互いの良さを生かしながら、粘り強く課題解決に取り組み、より良い社会を実現しようとする力を育て、チェンジ・メーカーの育成につなげていく。

3 探究学習重視型における目指す人間像

- 答えのない課題に対して、問いを立て続けることができる人
- 多様性を尊重し、互いの良さを生かすことができる人
- 積極的にチャレンジし、粘り強く取り組むことができる人

4 中高6年間を通して伸ばしたい力

- ① 答えのない課題に対して、問いを立て続けることができる力
 - ・答えのない課題に向き合うためには、自分が疑問に思ったことに対して、問いを立て、考え続ける姿勢が必要となる。また、解決を目指す過程を通して高められた知識や技能、思考力等を生かして、さらなる疑問に対して、再び問いを立て、考え続ける姿勢が大切であり、その過程を繰り返していくことが、よりよい答えを見出すことにつながっていく。
 - ・そうしたことから、答えのない課題に対して、問いを立て続けることができる力を伸ばしていく。
- ② 多様性を尊重し、互いの良さを生かすことができる力
 - ・より良い社会を実現していくためには、様々な人が、知識や経験、価値観、個性を持ち寄りながら、協働して取り組んでいくことが必要となる。
 - ・そのため、多様性を尊重し、互いの良さを生かすことができる力を伸ばしていく。
- ③ 積極的にチャレンジし、粘り強く取り組むことができる力
 - ・将来の予測が難しい社会の中では、あらゆる場面で、決まった答えのない困難な課題が待ち受けている。
 - ・そうした課題に主体的に向き合い、失敗を恐れず、積極的にチャレンジし、粘り強く取り組むことができる力を伸ばしていく。

5 「中高6年間を通して伸ばしたい力」を育む取組例（イメージ）

- ・授業の中で生まれた疑問に対して、時間をかけて、しっかりと追究できるようにする。
- ・大学や企業、研究所との交流を通して、外部の様々な取組に触れる。
- ・ディベートやプレゼンテーションにおいて、立場の異なる人の意見を聞いたり、多様な角度から話し合ったりする。
- ・フィールドワークにおいて、現地に足を運び、様々な人の話を聞くなどして、自分の考えを確認する。
- ・学校行事や生徒会活動において、生徒主体でより良い企画となるように協働して取り組む。

・・・

⇒これらの取組の充実を図ることで、生徒自身が成長できるようにする。

論点5 教職員配置に関すること

1 併設中学校の教職員配置

(1) 「中高一貫教育導入方針（2023年1月策定）」における教職員配置の考え方

- 中学校教員と、中学校の免許を持つ高等学校教員を配置する。
- あわせて、中高交流人事を進めるとともに、中高一貫校に勤務する教員を別枠で確保する。

(2) 基本的な考え方

- 中高一貫校の教育内容の実施及び学校運営に必要な教職員を配置する。
- 中学校と関連深い高校の学習内容に中学校段階から触れることで、より深い学びに取り組むこととしている一方で、大学受験に特化して授業進度を早めることは目指さず、先取りに偏らないこととしているなど、探究学習重視に見合うバランスの良い中学校教育を展開するため、主要教科は中学校教員と高校教員をそれぞれ配置する。
- 開校当初は、高学年の生徒が在籍しないため、中学校の内容の教科指導が中心になることから、中学校の教員を中心に配置し、3学年完成時に向けて段階的に高校教員を増やしていく。
- 併設中学校の教員の配置年数は、原則3年間とする。
ただし、大多数の者が一度に異動とならないよう配慮し、特に、開校4年目～6年目は、教科ごとや小中学校教員と高校教員の異動者のバランスを考慮しながら、在籍5年間に上限に年度ごとに分散して異動させる。
- また、高校教員が併設中学校から転出する際は、中高6年間、継続指導ができるような仕組みを検討する。

(3) 第一次導入校における教職員配置のイメージ

- 併設中学校の校長は、導入校の高等学校長が兼務し、校長定数を活用して副校長の配置を想定
- 教職員配置人数は、本県の中学校における学級規模別の教職員配置基準を基準とし、教諭については数人の加配定数を配置することを想定
- 探究、バカロレア、芸術系の授業を行う専門講師の配置は、カリキュラムに合わせて別途検討

(参考) 本県の中学校における学級規模別の教職員配置基準

[1学年2学級規模校]

開校	学級数	校長	教頭・教諭	養護教諭	事務職員	計
1年目	2学級	1	7	1	1	10人
2年目	4学級	1	9	1	1	12人
3年目	6学級	1	11	1	1	14人

[1学年3学級規模校]

開校	学級数	校長	教頭・教諭	養護教諭	事務職員	計
1年目	3学級	1	8	1	1	11人
2年目	6学級	1	11	1	1	14人
3年目	9学級	1	15	1	1	18人

- 津島については、国際バカロレアは1学級25人程度以下ですべての教科の授業を行う必要があることから、各学年の学級は「40人編制×2クラス」とするが、授業は少人数編制（1学級当たり26～27人×3クラス）で行うことを想定
- 技能教科（音楽、美術、技術、家庭）における教員配置については、導入校の高校教員が兼務可能である場合を除き、非常勤講師により対応することを想定
- 養護教諭は小中学校の職員を想定
- 事務職員は県職員1名の配置を、用務員は既配置の高校用務員2名が兼務、及び業務の増加分を臨時職員で対応することを想定
- 明和に専任の栄養教諭を配置し、第一次導入校4校を兼務することを想定

2 第一次導入校における開校準備員の配置

(1) 基本的な考え方

- 開校の前年度（2024年度）に、校内体制、年間行事予定、各種指導計画などを作成するための教員を配置する。
- 必要物品の購入、各種契約業務を行う事務職員を配置する。

(2) 開校準備体制のイメージ

準備体制		配置人数	併設中学校における職	2024年度の勤務場所	参考	
主担当	小中教員	1人	副校長	県教委事務局		
	高校教員	1人	教諭	中高一貫導入高校	県教育委員会にて選定	
	県職員	1人	事務職員			
	高校教員(津島のみ)	1人	教諭		国際バカロレアコーディネーター	
各教科担当(教育課程等の作成)	主要教科	高校教員	5人	教諭	県立高校	県教育委員会にて選定
		中学教員	5人	教諭	市町村立中学校	市町村教育委員会にて選定
	技能教科の中学教員	5人	教諭			

- 主担当は、専ら開校準備に従事することを想定。なお、津島高校には国際バカロレアの導入に伴う関連業務を行う1人を加える。
- 各教科担当の中・高教員15人は、在籍校における受け持ち授業時間数を軽減した上で、週1日、開校準備を行うことを想定（在籍校に対して非常勤講師時間を措置）
また、併設中学校において専任を配置する教科の教諭は、併設中学校への人事異動を想定
- 各教科担当のうち中学教員10人は、中高一貫校の所在市及び近隣市町村の学校から選定
- 各教科担当のうち高校教員5人は、開校前年度(2024年度)に導入高校への人事異動を検討

新しいタイプの定時制・通信制高校の設置に向けた検討事項

論点 1 通信制サテライト校の教育体制に関すること

・・・第1回部会（6/6）・第2回部会（7/25）

（基本的な考え方）

本校（旭陵・刈谷東）を適正規模にダウンサイジングするには、できる限りサテライト校のみで学びを完結させる必要がある。

〔検討内容〕

- 本校（旭陵・刈谷東）とサテライト校との面接指導（スクーリング）の実施割合
- サテライト校へ平日に登校できる校内体制の整備
- サテライト校でのスクーリングや平日の登校に対応した教職員の配置

論点 2 課程間の行き来に関すること

・・・第1回部会（6/6）・第2回部会（7/25）

（基本的な考え方）

全日制（単位制）、昼間定時制（単位制）、通信制（単位制）の間の行き来については、各課程の特色ある学びを尊重しつつ、生徒が自分のペースで学べる環境をつくる必要がある。

〔検討内容〕

課程間の行き来を実現するためのカリキュラム構築や、単位認定のしくみなどの検討

論点 3 その他・・・第3回部会（9月）

- 不登校経験者や特別な支援が必要な者などに対応した入学者選抜のあり方についての検討

具体的な入学者選抜方法については、愛知県公立高等学校入学者選抜方法協議会議において改めて検討。

- 市町村との連携のあり方についての検討

論点 4 設置形態に関すること・・・第1回部会（6/6）・第2回部会（7/25） 第3回部会（9月）

（基本的な考え方）

サテライト校について、設置形態を考える必要がある。

〔検討内容〕

本校（旭陵・刈谷東）の分校とするか、サテライト校を設置する高校の課程の一つとするかの検討

（参考）新しいタイプの定時制・通信制高校の設置について

（愛知県 定時制・通信制教育アップデートプランより抜粋）

1 通信制のスクーリングを行うサテライト校 と 小規模の昼間定時制・単位制 を 同じ学校内に設置（2025年4月開設）

⇒施設に余裕のある以下の高校に設置する ※地域バランスを考慮

海部	佐屋高校（愛西市）	知多	武豊高校（武豊町）
西三河	豊野高校（豊田市）	東三河	御津あおば高校（豊川市）

- ・現在の全日制を学年制から単位制へ改編
- ・定員 通信制 40人規模、昼間定時制 20人程度/学年

通信制 ⇄ 昼間定時制（単位制） ⇄ 全日制（単位制）

- ・原則、コース間の行き来を自由にし、自分のペースで学べる環境をつくる。
- ・添削指導のネット活用化、オンデマンドによる補習支援など、ICTを活用した通信制教育の充実。
- ・仮想空間「メタバース」、分身「アバター」を活用した「学びのVRネットワーク」で、人との関わりやコミュニケーションが苦手な生徒をサポート。

2 旭陵高校の通信制を適正規模へダウンサイジング

⇒通信制の本校に通学する生徒：320人/学年→2025年280人→最終的に240人へ

3 刈谷東高校の昼間定時制・通信制を適正規模へダウンサイジング

⇒昼間定時制：5学級/学年 → 2025年4月4学級 → 最終的に2～3学級へ

通信制の本校に通学する生徒：200人/学年→2025年160人→最終的に120人へ

4 相談・就労支援体制の充実

⇒スクールカウンセラーやキャリア教育コーディネーターなどの常駐化を検討

新しいタイプの定時制・通信制高校設置検討部会の検討状況について

論点	第2回部会（7/25）において提示した対応（案）	第2回部会 委員の主な意見
論点1 通信制サテライト校の教育体制に関する事	○サテライト校で学校生活が完結する教育体制とし、他課程の生徒と同様に、平日に登校することを原則とする。 <ul style="list-style-type: none"> ・面接指導（スクーリング）の実施割合は、全てサテライト校で実施する。 ・平日に登校できる校内体制の調整を行い、平日のスクーリングを設定する。 ・サテライト校には、通信制の教職員を配置する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・新しい学校を円滑に運営するために、必要な教職員数について見直しをもって、必要な人数を配置すべきである。 ・設置校の4校（佐屋・武豊・豊野・御津あおば）には、開校の前年度から、通信制や定時制のノウハウをもつ教職員を、開校準備員として配置する必要がある。 ・全日制・定時制・通信制の教職員が協力して学校を運営していくためには、一部の課程に負担が偏らないように留意する必要がある。
論点2 課程間の行き来に関する事	○各課程の生徒が、併修により、在籍する課程に関わらず学びたい科目を受講できるようにすることで、課程間を行き来することと同じような効果が生まれる。 ○生徒の事情に応じて、他の課程に転籍して学びを継続することもできるようにする。 現在の転学・転籍の取扱いには、受入れ可能人数、回数、時期等に制限があるため、4校の取り扱いについて、次のとおり緩和する。 <ul style="list-style-type: none"> ・受け入れ可能人数は、学校の裁量とする。 ・転学・転籍の回数及び時期は、生徒の希望を踏まえて校長が判断する。なお、単位認定については、当面は現行と同様、年度末に1回とする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・全日制・定時制・通信制の課程間を異動できることは、不登校を経験した生徒や日本語能力に不安のある生徒、進路希望が定まらない生徒にとって非常に魅力的であり、学校の特色となる。 ・定時制の生徒が通信制の授業を同時に履修（併修）できるようにすることは、3年間での卒業が可能となるため、生徒のニーズが高い。 ・不登校を経験した生徒は、環境の変化に適応することが難しい場合が多いため、他の課程との併修を行う際の時間帯や受講場所（教室）についての配慮も必要となる。 ・多様な生徒の学習ニーズに対応するには、1年単位だけではなく、半期で単位を認定する仕組みについても考えていく必要がある。
論点4 設置形態に関する事	○通信制は分校ではなく、設置する高校の課程の一つとして設置する。 組織面では、旭陵・刈谷東のサテライトではないものの、機能面では、旭陵・刈谷東のサテライトとして旭陵と刈谷東を中心とするグループを構築し、各グループにおいて、カリキュラムや教材の作成、添削及び面接指導、評価等の具体的な検討を進める。 ◎旭陵グループ・・・旭陵、佐屋、武豊 ◎刈谷東グループ・・・刈谷東、豊野、御津あおば	<ul style="list-style-type: none"> ・4校が、それぞれ旭陵高校と刈谷東高校からノウハウを学び、良い点を取り入れられるような協力体制を作る必要がある。 ・前例のない新しいタイプの高校を作って、運営していくことになるので、開校後も旭陵高校と刈谷東高校だけでなく、県教育委員会からの支援が必須である。

夜間中学の設置に向けた検討事項

論点1 生徒の受入れに関する事…第1回部会（5/29）～第3回部会（9月）

（基本的な考え方）

- 学齢を超えた者、外国にルーツのある者、不登校経験者など、多様な入学希望者に対応する必要がある。
- 学齢期の生徒の受入れについては、小中学校との連携が必要となる。

〔検討内容〕

ニーズ調査の実施、入学者の受入れ方法、学齢期の生徒受入れにおける課題

〔第1回部会における委員の意見〕

- ・ 調査を行い、ニーズを把握したうえで、生徒募集を考えるとよい。
- ・ 外国にルーツをもつ生徒の日本語能力も様々であるので、ニーズを把握し、主たる対象となる生徒を固める必要がある。

⇒入学希望者数や教育内容のニーズを調査するため、アンケート調査を実施。

対象：夜間中学の対象となる者で、夜間中学で学んでみたいと思う者

内容：回答者の属性や入学したい学校、入学を希望する理由、希望する支援の内容等

調査期間：6月13日（火）から7月14日（金）まで

回答状況：91件

※一部未着の調査票があるため、調査結果の公表は、8月下旬を予定。

論点2 学習内容に関する事…第2回部会（8月）・第3回部会（9月）

（基本的な考え方）

- 日本語指導が必要な外国にルーツのある者や不登校経験者、小学校段階からの学び直しが必要な者にも対応するカリキュラムが必要となる。

〔検討内容〕

多様な生徒に対応した学習内容とするための方法などの検討

論点3 その他…第3回部会（9月）

- 夜間中学では、生徒の希望に応じて学校給食を提供する。（夜間定時制高校の調理場を活用する方向で検討）
- 市町村との連携のあり方についての検討

論点4 教職員等の配置に関する事…第1回部会（5/29）～第3回部会（9月）

（基本的な考え方）

- 夜間中学には教育内容の実施に必要な教職員のほか、教員以外の専門スタッフや開校準備員などを考える必要がある。

〔検討内容〕

教職員・教員以外の専門スタッフ・開校準備員の配置

〔第1回部会における委員の意見〕

- ・ 教員配置は再任用の活用も含めて検討するとよい。
- ・ 開校準備に専念できる職員を配置する必要がある。
- ・ 教員以外の通訳などの専門スタッフをしっかりと確保することは重要である。

論点5 設置形態に関する事…第1回部会（5/29）～第3回部会（9月）

（基本的な考え方）

- 県立夜間中学4校について、設置形態を考える必要がある。

〔検討内容〕

設置形態について

①全て単独校、②本校1校と分校3校とする2つの方法が考えられる。

〔第1回部会における委員の意見〕

- ・ 地域のニーズにも違いがあることから、4校とも単独校とすることがよいと思う。
- ・ 夜に通学するという昼間の中学校にはないリスクがある中で、校長が責任をもって運営できる体制とすることが重要である。

1 第1回部会（開催日：7月4日）

国の高等学校教育に関する考え方や愛知県における普通科の現状と課題を示し、県立高校普通科の魅力化・特色化に向けた意見交換を行った。

部会委員の主な意見

探究的な学びの充実

- 「総合的な探究の時間」の内容を見直して発信していきたい。ただし、外部と連携した探究活動を行うためには、費用面の課題がある。
- 単なる調べ学習とは異なる探究活動としてのゼミ活動を行う際の課題は、指導する教員の数である。ティーム・ティーチングで指導できると質の向上につながる。
- 「総合的な探究の時間」では教員が生徒任せにしてしまうことが多く、教員研修を充実させることも大切だと感じる。探究の学びを充実させるために、地域との連携も重要である。
- 生徒・保護者が大学進学を前提としていることが多いため、大学との接続が保証されなければ、普通科高校では「探究」に時間を注ぐことが難しい。
- 「あいちラーニング推進事業」で各学校が「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を推進しているが、探究ファシリテーターとなるための教員研修や、高校と大学・研究機関等の外部連携等を支援する事業も必要ではないか。
- 大学が総合型選抜に力を入れ始めていることを踏まえれば、高校での学び方は今後より一層大切になる。商業科出身の大学生が、高校時代の「課題探究」の授業で身に付けた探究力を生かして充実した学びをしているため、これを普通科に生かせないか考えてみたい。

普通科新学科の新設

- 普通科改革を進めるには、現在の教育活動や業務を精選し、教員の負担を減らす必要がある。一方で、「グローバル探究科」という新学科を苦勞して立ち上げても、中学生に理解されるか不安があり、中学生や保護者へのPRを工夫したい。
- 生徒のほとんどが大学へ進学する中で、今後、「地域社会学科」の設置や連携型中高一貫教育を導入することが、中学生や保護者に大学進学に不利であるかのように受け止められないか心配している。また、依然として知識習得型の授業観から抜け出せない教員の意識改革も必要である。

中学校・中学生へのPR

- 中学生は高校のスクールポリシーを見て特色を理解することが難しい。各高校が特定の教科に特化して強みをPRする方法もあるのではないかと。今年から導入された特色選抜も活用できるとよい。
- 中学校の教員にも、普通科高校の魅力をどう生徒に伝えるか悩みがある。県教育委員会のホームページの充実や体験入学の複数回実施など、中学生に高校の情報が入ってくるようになればよいと思う。
- 中学校からは、勉強・部活・学校行事にしっかりと取り組む「安心できる学校」であり続けてほしいと言われている。
- 高校が探究活動に力を入れるのは中学校にとってありがたいことである。しかし、高校の探究活動を魅力に感じる中学生は少数にとどまると考えられる。高校生が面白がって探究に取り組み、それが後輩の中学生に「ロコミ」で伝わると、中学生に響くのではないかと。
- 県立高校の大多数を占める普通科高校の魅力化を進め、中学生に伝える工夫をすることで、魅力化や特色化が生徒募集状況の改善につながることが必要である。
- 中学校と地域の橋渡しをするコーディネーターや広報担当職員を配置できるとよい。

コース制の検証

- コース制は学びの特色を出せる一方で、学びの範囲が狭まってしまいう印象があるため、悩ましい面がある。
- コース制の成果検証をする際には、コースを選ばなかった生徒の意見も踏まえる必要がある。
- コース制は、今後の展望を含め、教育内容が問題なのか、伝え方が不十分なのか、を十分に検討していかなければならない。

2 今後の予定

2023年度 部会を開催（9月、12月を予定）

2024年度 継続して検討